

2010  
2010.Autumn

秋

増刊号

# かり KARIGANE がね



350号によせて

〔季刊〕かりがね 増刊号

NO.350

発行人 ● 社会福祉法人かりがね福祉会



## 特集

# 350号によせて



### 半田 正直

今回機関紙が350号を迎え、私が担当させていただいた当時が丁度100号で、やはり特集号として初めてカラー印刷をさせていただきました。とても懐かしく想いだされます。

会員や地域の皆様のご期待に沿えるように日々努力をしていきたいと思いますので、今後ともご支援ご協力の程をよろしくお願い致します。

### 塚田 弘人

32年間の思い出が詰まっているライフステージかりがねの建物が、改築のため解体される。引っ越し作業に追われる中、たまたま訪れた知人と玄関前にある松の木の話になった。それは31年ほど前、当時真田町で成人を迎えた人たちが、殺風景だった管理棟の前に緑をと記念に贈ったということだ。大きく育った松の木を眺めながら、自分の知らないところで、今日に至るまで地域の皆様から支えて頂いてきたことを改めて感じた。松の木は改築後も敷地内に移植される。そしてこれからもライフステージかりがねの行く末を見守ってくれることだろう。

### 竹井 達郎

わがかりがね福祉会は、障がい者自立支援法発足の先陣を切って、実に様々な事業展開を行ってきました。

それは決して「法律に対処する」という受け身的なものではなく、「そのひとの生活・人生を豊かにしよう。」という思いを結実させようと始めたもので、今も「どうすれば?」という課題に日々取り組みながら実践を積み重ねています。

その中のひとりであることをとても誇りに思っていますし、その誇りをみんなで共有していきたいと思っています。

### 竹内 洋一

かりがね学園が地域の中で産声をあげてから32年。その歩みの途中から仲間に入れていただき早18年が経ちました。

今思い起こすのは、私がお世話になってから亡くなら

れていった利用者さんの面影。

「どんな思いで旅立って行ったんだろうか…」

誰にも人生の終末が必ず訪れます。だからこの仕事を続けさせていただいている限り、日々精一杯の思いを込めて、利用者さんと向き合っていきたいです。

### 三井 千愛

一昨年、かりがねは三十周年を迎え、改めて多くの皆さんに支えられてきた事に感謝する年でありました。今年度、三十年間過ごしてきた建物を取り壊し、改築するという大事業が始まりました。取り壊しにあたり、簡単ではありますが「いままでありがとう会」を行いました。思えば、その半分近い年数を利用者さんたちと過ごし、その間に自分自身も結婚や出産を経て、今ここにいることを振り返ると年月の流れを感じる時間でした。

そんな中、利用者さんの状況や環境、制度などが変わり、支援の在り方も変化していると感じています。けれど、かりがねではいつでも地域の中で家庭的に暮らす、利用者さんを主に思いを汲み取る事を大切にしたい支援を目指してきましたと思います。

それでもまだまだ実現できない“思い”が沢山あります。また新たな“思い”も生まれてきます。

改築後の建物にはそんな“思い”を形にしたい、という利用者さん、家族、支援者等の“思い”が詰まっていると思うのです。

その場所で“思い”を形にするお手伝いが少しでも出来ると嬉しい、そんな気持ちで今は完成後の生活に想いを巡らせています。

### 竹田 淳一

私が、かりがねに来て今年で17年になります。つくづく年月の経つのは早いものだと感心してしまいます。入った頃は何も分からず、先輩職員に教えられながら仕事をしてきたことが、つい昨日のように思い出されます。かりがねも当時と比べると、利用者さんも職員もずいぶん増えたように思えます。最近思うのですが、若手の職員がずいぶん成長しているな、と感じます。おそらく学校等で専門的な学習をされてきているんだと思いますが、とてもいい傾向だと思っています。利用者さんへの支援も以前より充実してきている



ように感じますが、更に前進していくことが大事だと思います。ともに最先端の福祉を目指しましょう。

## 保母 和子

三十数年前、知人から「真田の地に障害を持った方たちの施設を作りたい」と聞き私とかりがねの関わりが始まりました。

いろんな立場の方たちと小さな関わりが始まりやがてそれが大きな輪になって、かりがね学園ができました。

はじめのうちはボランティアをしているつもりで学園との関わりを持っていましたが、ある家族の方から「家から遠くの施設に子供を送っていかなければならなかった、夕暮れの電車のホームに立った親の気持ちができるか」とお話しいただいた時、今までのボランティアとしての関わりから、人生を通じてかりがね学園と共に歩もうと決めました。

今では職員としてみんなと泣いて、笑って、激怒して、楽しく生活を送っています。今年度改築に関わることになり、いろんな方たちの想いや支援、希望が頭をよぎります。沢山の想いでが詰まった施設は無くなってしまいましたが本当に「いままでありがとう、これからもよろしくお願いします。」と言いたいです。ちょっとふくぎつ・・・。

## 工藤 淳

①私が、かりがね福祉会で働かせていただいたから10年目になる。10年ひと昔というが、私が勤め始めたころにくらべ今のかりがね福祉会は、大きく様変わりした。ハード(建物や事業)、ソフト(職員の配置や利用者さんへのサービス提供)が格段に良くなったと思う。これからの10年かりがね福祉会が、現在よりもさらに良くなるために努力していきたい。

②人は一人では生きられないとよく耳にする。

孤立…人といたいのに一人

孤独…まわりに人がいるのに一人

孤高…誇りを持って一人  
だそう。

今年の初め施設長が日本一の事業所を目指そうと言っていた。日本一の解釈はそれぞれ違うと思うが、「孤高」=誇りを持って「ひとつ」=オンリーワンを目指していきたい。

## 飯島 理佳

病院外来勤務時代に皆さんに出逢いました。そして

一緒に生活したいと直感的に思い・・・あれから泣いて笑って10年が過ぎようとしています。あの時の感覚は命と向き合う時よみがえります。生命ばかりでなく、その方の人生や御家族と関われる医療をさせていただいることに感謝と感動を覚えます。かりがねの皆さんが元気で笑っている時が幸せです。何でもない毎日に私達は癒されます。影ながら、健康な生活を送れるよう支援させていただき、病気や怪我の時には隣にいらせてもらえる存在でありたいです。これからも平温な日々を大切にしていきます。

## 佐納 良裕

利用者さんも私も縁ある人達との出会いや絆を大切に暮らしていきたい。地域の中で役割を担い、夢や希望を叶え、互いに認め合えることが出来たらいいな。福祉の制度の中だけで利用者さんの暮らしが完結しないように考えています。生きている限り日々精進です。

## 沼沢 成一

夏の真田の山々を眺めながら、勤務に向かう。歩きながら、山からの風が心地よいことを知ることができた。そよぐ稲にも、穂が見え始めている。真田の四季は、美しいと思う。

改築工事が始まって、ひと月。事務所や会議室のあった場所は、すっかり更地になっている。この350号が形になる頃には、どんな景色になっているのか楽しみだ。

私が「かりがね」の編集に参加させていただいたのが、333号からだ。信綱寺の桜の下での表紙。この号からA4サイズになり、表紙が全面カラーになった。

「かりがね学園」から「ライフステージかりがね」に改名されたことが、巻頭の記事だった。続いて「さなだの郷」の完成の記事。今思うと、ちょうど節目の頃だったかと思う。

そして、350号を送らせていただく今、「かりがね」の今とこれからを、お伝えする役割を、改めて感じています。



## 梶屋 夏織

最近、ある利用者さんとの会話で、心に残った利用者さんからの言葉…。

「仕事でもなんでもそうなんだけどさ、新しいことを始めると、最初ってさあ、みんな誰でも、めずらしくって新鮮で、とびつくんだよね。でも、続けることが難しいんだよ…。」

なんだかこの言葉が、熱しやすく冷めやすい私の日々の行動にずっしりとおぶさってきました。

かりがね機関紙350号。『350回の継続』に歴史の重みを感じ、今年度より機関紙委員会に所属させて頂いています。

利用者さんの言葉、記念すべき機関紙350号の発行を機に、公私共に『継続する大切さと責任』を心にとめ自分の在り方を改めて見直し、『継続から結果』を導き出す毎日を積み重ねていきたいと思っています。

最後になりましたが、かりがね機関紙350号発行を心からお祝い申し上げます。

## 滝澤 加奈恵

気が付けば…働き始め7年目になりました。就職するまでは菅平までの通り道としか見ていなかった真田町へ通い続けています。そして…編集委員は5年目となった今、機関誌は350号を迎えました。編集委員としての今までの349紙に劣らぬよう、これからもかりがねの「今」を皆さんに伝えていかれればと思います。

## 黒岩 友香

皆さんがかりがねで積み重ねて来た歴史は様々で、それぞれかけがえの無い物だと思います。まだまだ経験は浅く振り返れば反省も多いですが、迷いながら悩みながらも楽しみながら、一步一步、日々を積み重ねてきました。これからも、「今」出来る事をひとつずつ、尊敬しながら、ポジティブに、一緒に、日々を歩んで行きたいと思っています。

## 清水 栄紀

私はかりがね福祉会に来て4年目になりました。同時に機関紙編集委員としても4年目になりました。

編集委員として、今までも時々このような場で書かせて頂く機会があったのですが、いつも思うのは「かりがね32年の歴史」です。この機関紙も今回350号という事でバックナンバーを少し見ましたが、とても全部は見きれませんでした。逆にそれだけの歴史がかりがねにはあるのだと改めて実感しました。今後もありがね福祉会を支援して下さる

皆様へ、この機関紙を通じて「かりがねの新しい歴史」をお届けさせて頂きたいと思っています。

## 内堀 みな美

かりがね福祉会の機関紙がスタートし、今回記念すべき350号を迎えました。昨年はかりがね福祉会30周年を迎えたということで、とても長い歴史を感じております。過去の機関紙やアルバム、さまざまな資料を読み返すことで、利用者さんの暮らしの移り変わりや歩んでこられた道、またスタッフの成長過程を振り返ることが出来ました。機関紙は皆様の力に支えられ作成できているのです！これからたくさんの方から愛される機関紙を作り、かりがね福祉会を盛り上げていきたいと思っています。

私は今年で4年目になり、まだまだ半人前ではありますが、長い歴史の記念すべき日に携われたことを誇りに思います。そしてこれから先の新しいかりがね福祉会の歴史を作っていきたいと思っています。

## 坂口 香澄

2年間お世話になったOIDEYOハウスのみなさんとお別れをし、4月からアトリエFuuに配属となりました。異動が決まった時は、期待と不安でいっぱいでした。毎日周りのスタッフや利用者さんの笑顔に励まされていました。OIDEYOハウスでの2年間は、充実していてあっという間で、スタッフや利用者さんは温かくて、楽しくて… 離れるのが寂しかった…。

アトリエFuuに異動して、また一からのスタートで覚えることがたくさんあって不安になりました。何度も挫折しそうになりましたが、私を励ましてくれたスタッフや利用者さんのお陰で、ここまでくることができました。

これまでの経験を活かして更に飛躍したいと思っています。

## 西澤 美奈

私がライフステージかりがねで働いてから1年がたちます。毎日が日々新しい発見です。思いの共有は難しいですが、利用者さん達の気持ちに寄り添い楽しくすごしています。ライフステージかりがねは活動と生活の場所です。利用者さんが帰ってきた時安心できる場所、ここが家だと思えるような居場所を提供し、関わっていけたらと思っています。